

令和 6 年 6 月 26 日現在

機関番号：15501

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2018～2023

課題番号：18K01035

研究課題名（和文）フランス国旗・国歌の歴史学 基礎的研究

研究課題名（英文）Historical studies of the French national flag and anthem - basic research

研究代表者

竹中 幸史（Takenaka, Koji）

山口大学・人文学部・教授

研究者番号：00319386

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,800,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、19世紀前半のフランス史の展開において、国旗および国歌が果たした機能と、市民によるそれらの受容や拒絶、また改変を実証的に考察せんとするものである。ルアン市を対象とした研究の結果、国旗、国歌のみならず、広くフランス革命期の「空間の革命」に関して、以下のような事実が明らかになった。

第一に、こうした空間の革命は共和2年ルアンにおける街路名の変更の他にも、革命祭典の行列コースの変遷や自由の木植樹においても該当した。第二に、テルミドール反動後の哀悼祭典には一時期廃れた国歌の復活が見られたが、19世紀の祭典においては逆に国歌が衰退し、三色旗が強調されることになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、これまでの「記憶」研究が十分に検討してこなかった国旗・国歌の歴史学をあつかう。市民生活に国旗・国歌はいかにして根づくのか。この問いに答えるには、フランス革命期から19世紀前半に及ぶ記憶と忘却の作用を考慮に入れて、長期的に革命的象徴を分析する必要がある。それゆえ祭典および公式行事における三色旗とラ・マルセイエーズの受容、ならびにこれらの実践の場となった「空間」の革命について多角的に考察した。本研究成果は政治文化の中期・長期的影響に関する新知見獲得のほか、わが国をはじめとした近代国家における公共性について重要な示唆を与えることを期待できる点で創造性が高い。

研究成果の概要（英文）：This study aims to empirically examine the functions played by the national flag and anthem in the development of French history in the first half of the 19th century, and their acceptance, rejection and modification by the citizens. The results of the research in the city of Rouen reveal the following facts, not only about the flag and anthem, but also about the 'revolution of space' in the French Revolutionary period at large.

Firstly, these spatial revolutions were not only the renaming of streets in Rouen in 1793-94, but also in the evolution of the processional course of revolutionary festivals and the planting of the Tree of Liberty; secondly, there was a revival of the national anthem, which had been abandoned for a time, in the mourning celebrations after the Thermidorian coup d'Etat, while in the 19th century festivals, conversely, the national anthem declined and the tricolour was highlighted.

研究分野：近代ヨーロッパ史

キーワード：フランス革命 国旗 国歌 祭典 記憶

1. 研究開始当初の背景

フランスにおける国民意識と変容を網羅的に叙述した P・ノラ編(谷川稔監訳)『記憶の場』第1巻が刊行(1984年)されてから30年あまり。西洋史研究の分野においては集合的記憶の変容に関して、大変多くのインクが流されてきた。ところが国民意識を生成する装置としてもっとも典型的な国旗・国歌について、研究が深化したかといえ、必ずしもそうではない。

わが国に限らず、実は、国旗・国歌に関する歴史学研究の数は少ない。フランスにおいても『記憶の場』のなかでジラルデが三色旗、ヴォヴェルがラ・マルセイエーズの歴史を叙述的に取りあげたとはいえ、その後の実証研究は、ダリソンによるセヌ＝エ＝マルヌ県の祭典研究(1999年)のみである。また近代国家における国旗・国歌は主に学校教育を通じて祖国愛を醸成してゆくが、19世紀フランスの学校教育と三色旗およびラ・マルセイエーズの関係を問うた先行研究は、意外にも、皆無である。

市民生活に国旗・国歌はいかにして根づくのか。この問いに答えるには、共和政、帝政、復古王政、七月王政と体制が激しく入れ替わり、かつ大衆メディアが未発達である時代における記憶と忘却の作用が現代とは全く異なることを考慮に入れて、フランス革命の影響を長期的に捉える必要がある。それゆえ祭典および公式行事における三色旗とラ・マルセイエーズの受容、および公教育の現場における三色旗掲揚ならびにマルセイエーズ斉唱の実践の2点に注目して、近代フランスの政治社会史像を解読することにした。

2. 研究の目的

J=C・マルタンは革命を1750年代～1830年代にわたる王政再検討の試みと捉えている。これまで申請者も「記憶」の定着という視角から、革命をいっそう長期的に捉え、第3共和政初期までを射程に収めて叙述する一方、革命期の政治結社、祭典、公教育に関する研究を通じて、これらの政治文化が市民生活に浸透してゆく中で、市民の「国民化」が進行するだけでなく、これらの文化が本来もっていた意味そのものもまた、変容せざるをえないことを示してきた。

本研究では、こうした手法を国旗・国歌研究に応用し、近代的政治空間の揺籃期の実態を考察する。ゆえにその狙いは、三色旗とラ・マルセイエーズを政治文化として考察し、さらに19世紀前半を「長いフランス革命」の一部とみなして、革命の「記憶」が定着する模様を分析することにある。

3. 研究の方法

研究対象地域であるルアンの政治社会史を2次文献から再構成したうえで、まず19世紀のルアンにおける祭典および公式行事のさい、三色旗とラ・マルセイエーズがいかに利用され

たのか、主に一般市民への働きかけと彼らの反応を検討する。そこで各政治体制にまつわる史料を蒐集するため渡仏し、ルアン市立図書館とセーヌ=マリチム県文書館における調査を行った。特に蒐集・調査の対象となるのは、市議会・県議会議事録や警察関係の史料であるが、渡仏中に読みきれない史料はデジタルデータの形で入手した。

ついで公教育の現場における三色旗掲揚ならびにマルセイエーズ斉唱の実践の分析については主に教育史博物館(ルアン)に所蔵されている教科書や種々の手引き、プログラムが検討対象となる。そのほか、セーヌ=マリチム県文書館における調査も継続して行い、関連史料を入手した。

さらには研究の総合を図るため、祭典や学校といった「記憶の場」の作用を相互補完する史資料 - 文学作品、シャンソン、図像、子供向け読み物、玩具など - を分析し、三色旗とラ・マルセイエーズの表象形態を研究することも必要であった。

4 . 研究成果

本研究は、19 世紀前半のフランス史の展開において、国旗および国歌が果たした機能と、市民によるそれらの受容や拒絶、また改変を実証的に考察せんとするものである。対象地域は、セーヌ=マリチム県の主邑ルアン市である。それゆえルアン市立図書館、セーヌ=マリチム県文書館において、複数回、諸史料の収集を行った。現地で読了できない史料の多くはデジタルデータに保存し国内で読解作業を進めた。その過程において国旗、国歌のみならず、広くフランス革命期の「空間の革命」に関して、以下のような事実が明らかになった。

1) フランス革命期ルアンにおける街路名の変更

国旗・国歌研究の予備調査として、革命期におけるルアン市の街路名の変遷、空間の世俗化・革命化を調査した。フランス革命期にはキリスト教、王政、封建制にまつわる自治体名が革命的名称に変更されたが、都市の中の街路名等の変更についてはほとんど研究が見られない。そこで市議会議事録や地図などを基にして分析した結果、ルアンにおいては 152 の街路、17 の大通り、5 の袋小路、18 の広場など、実に 192 か所において名称が変更されたことが明らかになった。新名称には「自由」「平等」といった革命期の理想とされた概念、マラーやブルトゥスなど新旧の共和政に尽くした偉人、そして国防に関わる地名があてられており、これらの名称変更が広義の公教育になっていたことが示された。

さらにはこれら変更された名称が旧名に復帰した時期についても考察した。その結果、これらの名称は 1795 年春以降、順次戻されてゆくが、王政・封建制に関する名称は王政復古期まで戻らなかったことが明らかになった。さらに言えば、今日でも旧名に復していない街路は少なからず存在し、革命期の「記憶」の残存、長期持続について見通しを得た。

2) フランス革命期前半ルアンにおける革命祭典と自由の木

フランス革命期においては、革命やその成果、あるいは革命に殉じた人を祝賀する祭典、すなわち革命祭典が広く行われたが、これを空間の革命という側面から再検討した。その結果、以下が明らかになった。革命初期の祭典の行列はブルジョワの居住地域である市南西部を通過していたが、共和 2 年(1793 年秋~94 年秋)には民衆の居住地区を経由するようになっていた。しかもその経由地は、1) で述べた「自由」や「平等」といった革命の諸概念を表す街路であった。ところが革命の反動局面になると、行列は再び富裕層の居住地区を経由

し、さらには民衆的性格を有す地名を避けるようになっていた。このことは革命期の祭典行列のコースが教育の一環であったことだけでなく、祭典に参加したルアン市民の革命に対する心性を表している。

また再生と民衆の権力の象徴でもあった「自由の木」についても調査した結果、革命的理念を表す名称の広場で多くが植樹されており、さらには旧体制期に栄えていた地区、富裕層の居住地区に集中していることが明らかになった。このことは植樹行為が旧体制の一掃、すなわち「空間の革命」であったことを明瞭に示している。

3) テルミドール反動後の革命祭典と国民的象徴

テルミドールのクーデタ後の革命祭典については、ほとんど実証研究がない。そこで当該時期のルアンの革命祭典を分析し、併せて国旗・国歌を含む国民的象徴の使用を検討した。まずテルミドール派国民公会期の革命祭典については、革命礼拝の性格が継続していることが確認できた。一方で、それまで革命を主導していたモンターニュ派や民衆を称揚するようなセレモニーや言説が消失している。そして1795年以降は、モンターニュ派の推進した革命的象徴であるラ・マルセイエーズの歌唱が控えられ、王党派が好んで歌った「人民の目覚め」が歌われるようになっていく。そしてモンターニュ派を象徴する「山」のモニュメントが破壊されるなど、暴力・攻撃性が顕著になっているのである。

加えて革命期(1790-99)ルアンで行われた10の哀悼式典の構成、儀礼、象徴に関する比較を行った。その結果、総裁政府期の祭典では基本的に同じプログラムが続けられるが、例外的に哀悼式典と戦勝祝典が差し込まれること、哀悼対象が軍人であること、かつ、そのテーマは「死と再生」ではなく「死と復讐」が選択されることが明らかになった。これら祭典は哀悼儀礼を通じた国民の「理想的な死にかた、理想的な命の尽き方」の教示であるが、ここでは愛国歌ラ・マルセイエーズの復活が見られる。一方で、三色旗が特別の位置を占める儀礼はない。これは革命初期の軍事的祭典とは異なる様相を示しているといえよう。

4) 19世紀の国家祭典における国旗・国歌の利用

以上のような国旗・国歌の利用は19世紀の祭典において変化が見られる。特に統領政府期、帝政期・復古王政期の祭典におけるプログラムを用いた分析の結果、祭典における国家的象徴の連続と断絶(ラ・マルセイエーズの衰退、三色旗の復活と強調)が顕著であった。これらはフランス革命の「記憶」がローカライズされながら定着する、生きられた革命の姿を反映するものといえようが、行政、教育、宗教など、統領政府期、帝政期の政治空間全体において占める位置を考察すべきであり、分析は令和6年度以降の課題である「革命祭典から国家式典へ：総裁政府期・ナポレオン期フランスにおける祭典と国民統合」に発展的に引き継がれた。なお国旗・国歌の登場頻度についてはデータベース化しており、別稿を準備中である。その際には、2022年度に行なった科学研究費補助金基盤研究(A)「共和政の再検討」(代表：中澤達哉)の主催する合評会「革命史の叙述は変わるのか」におけるコメントを中心に執筆した書評、加えて山口日仏協会における報告内容も接合して、提示されることになる。

5) 残された課題

新型コロナウイルス感染症の流行により、教育史関連の一次史料は2023年度にようやく一部を入手することができた。それゆえ、これらの実証分析は今後の課題となる。一方で、19

世紀半ばまでの祭典および公式行事に関わる史料を確認できたことにより、2024 年度以降の研究の準備が整った。今後は統領政府期・帝政期の祭典における国旗・国歌の利用に関する実証論文の執筆に着手する。

またルアン市立図書館において旧体制下におけるアンリ 4 世及びルイ 14 世による入市式の史料を入手しえた。今後、17 世紀の祭典と 18 世紀以後の祭典を比較する研究を行うことも可能となろう。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 竹中幸史	4. 巻 273
2. 論文標題 高橋暁生編 『<フランス革命>を生きる』	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 西洋史学	6. 最初と最後の頁 67-70
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 竹中幸史	4. 巻 270
2. 論文標題 （書評） 東出加奈子著 『海港パリの近代史 セーヌ川水運と港』	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 西洋史学	6. 最初と最後の頁 111-113
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 竹中幸史	4. 巻 第5巻
2. 論文標題 フランス革命期の教育と祭典	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 中部高等学術研究所 『人文学の再構築 報告書』	6. 最初と最後の頁 17-29
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 TAKENAKA Koji	4. 巻 1
2. 論文標題 La Revolution de l'espace : Les rues, les fetes et les arbres de la liberte; Rouen en l'an II	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 La Revolution francaise vue de l'Asie : Etat actuel des recherches sur la Revolution en Coree et au Japon Communications et commentaires	6. 最初と最後の頁 77-87
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計12件（うち招待講演 4件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 竹中幸史
2. 発表標題 阿河雄二郎著『近世フランス王権と周辺世界 王国と帝国のあいだ』
3. 学会等名 関西フランス史研究会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 竹中幸史
2. 発表標題 ジャコバンの諸相：「王のいる共和政」と「王のいない共和政」を中心に
3. 学会等名 『革命史の叙述は変わるのか』（科研費補助金基盤研究（A）「共和政の再検討」（代表：中澤達哉）主催
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 竹中幸史
2. 発表標題 書評：藤原翔太著『ナポレオン時代の国家と社会 辺境からのまなざし』によせて
3. 学会等名 西洋近現代史研究会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 竹中幸史
2. 発表標題 空間の世俗化と革命化 フランス革命期の地名変更
3. 学会等名 第180回関西フランス史研究会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 竹中幸史
2. 発表標題 フランス革命と7月14日
3. 学会等名 山口日仏協会（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 竹中幸史
2. 発表標題 空間の革命 共和暦2年ルアンにおける街路、祭典、自由の木
3. 学会等名 シンポジウム アジアから見たフランス革命（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 竹中幸史
2. 発表標題 自由・平等・友愛の夢 フランス革命期の国民祭典
3. 学会等名 第4回博覧会を歴史に学ぶセミナー（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 竹中幸史
2. 発表標題 書評：山崎耕一著『フランス革命 「共和国の誕生」』 日本におけるフランス革命史研究における本書の位置
3. 学会等名 フランス革命史研究会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 竹中幸史
2. 発表標題 フランス革命期の「教育」と祭典 共和暦2年の文化革命
3. 学会等名 中部高等学術研究所「人文学の再構築」第5回研究会（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 竹中幸史
2. 発表標題 祖国のために死ぬこと ルアンにおける哀悼式典（1790-99）
3. 学会等名 フランス革命研究会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 竹中幸史
2. 発表標題 フランス革命期ルアンの哀悼式典（1791 - 99）
3. 学会等名 第200回関西フランス史研究会
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 竹中幸史
2. 発表標題 英雄か独裁者か ナポレオン・ボナパルトの虚像と実像
3. 学会等名 山口日仏協会（招待講演）
4. 発表年 2024年

〔図書〕 計4件

1. 著者名 竹中幸史（日本18世紀学会『啓蒙思想の事典』編集委員会）	4. 発行年 2023年
2. 出版社 丸善出版	5. 総ページ数 714
3. 書名 啓蒙思想の百科事典	

1. 著者名 松浦義弘、山崎耕一、竹中幸史、チョイ・カプス、山下雄大、キム・ミンチョル、楠田悠貴、藤原翔太、クォン・ユンギョン、早川里穂	4. 発行年 2021年
2. 出版社 風間書房	5. 総ページ数 217
3. 書名 東アジアから見たフランス革命	

1. 著者名 竹中幸史、上垣豊、図師宣忠、黒岩三恵、小山啓子、嶋中博章、玉田敦子、田中佳、松嶋明男、東出加奈子、橋本周子、角田奈歩、原聖、谷口良生、須藤健太郎、田崎直美、福島都茂子、中村督	4. 発行年 2020年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 313
3. 書名 はじめて学ぶフランスの歴史と文化	

1. 著者名 竹中幸史、岩井淳、山崎耕一、菅原秀二、高橋暁生、那須敬、穴井佑、平正人、塩出浩之、三谷博、山本信太郎	4. 発行年 2022年
2. 出版社 山川出版社	5. 総ページ数 324
3. 書名 比較革命史の新地平 イギリス革命・フランス革命・明治維新	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------